2010年(平成22年)7月24日 土曜日 西日本新聞

応援にも国際化の風

デンマークとタイの若者観戦「一本狙う姿勢興奮」

2007年から韓国など海外のチームも参加する金鷲旗大会だが、国際化は青畳の外でも進む。今大会をタイやデンマークの若者が観戦。柔道の本家を支える日本の高校生の活躍に目を見張る。金鷲旗ならではの「階級無差別、抜き勝負」に初めて接した海外の若い柔道家たちは、興奮を抑えきれないようだった。

【1面参照】

22、23日と続けて大会を観戦したのは、デンマークの地域クラブに所属する16～18歳の柔道選手6人とコーチ。そして、タイの16歳以下55キロ以下級高校柔道チャンピオンのスパナット・パサシー選手(16)と、同選手らに柔道を教えている三浦守さん(53)の計9人。

海外の若者たちは2週間ほど前から、三浦さんの母校、鎮西(熊本)の練習に参加。金鷲旗のことを知って、初めて会場に足を運んだ。「積極的に前に出る姿勢と、内またを仕掛けるスピードが速い」。デンマークの高校生トゥア・ニールセンさん(18)は熱っぽく話す。気持ちの強さと技のレベルの高さに驚いたという。

コーチのスネ・オゴーさん(40)によると、ヨーロッパの柔道は「相手と組まないようにするスタイル」。相手の弱点を分析し、有効などのポイントを取った後は、できるだけ接触を避けるのが普通という。「(シドニー五輪男子柔道金メダリストの)井上康生さんのような『組んで投げて一本を取る』スタイルを高校生からやっているのが知れて刺激的だった。日本のいい部分を国の子どもたちに教えたい」

一方、小柄のスパナットさんは「小さな選手でもきっちり寝技で抑え込めれば、大きな選手に勝てることが新鮮だった」と語る。抜き勝負に関しては「僕はスタミナがないから重い階級の選手と何度もやれない。頑張って体力をつけたい」と笑った。

(飯田崇雄)

初めての金鷲旗高校柔道大会を楽しむデンマークとタイの高校生たち＝23日午後4時すぎ、福岡市博多区のマリンメッセ福岡